

博 多 84

—博多遺跡群第122次発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第710集

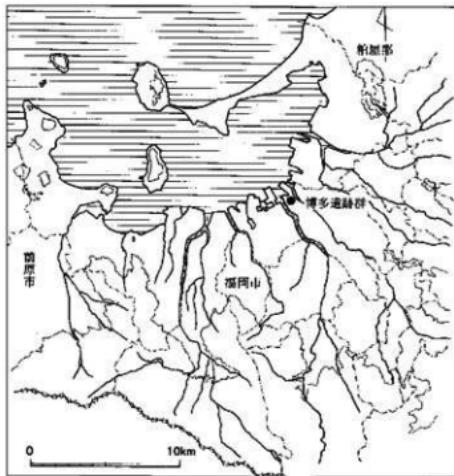
2002

福岡市教育委員会

博多 84

—博多遺跡群第122次発掘調査報告書一

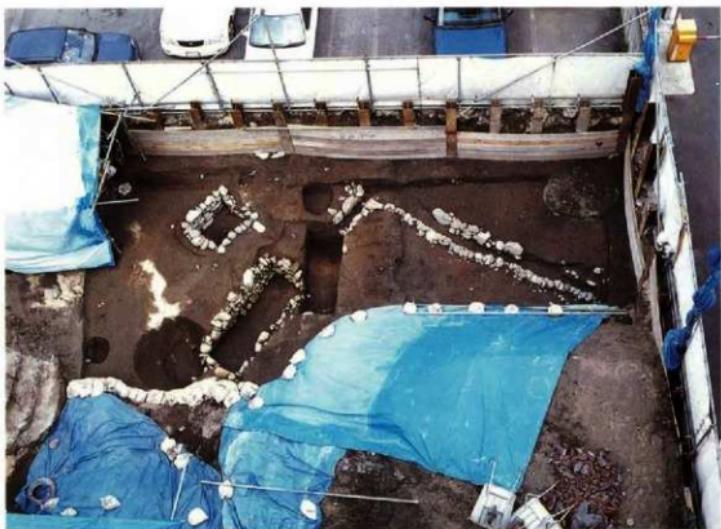
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第710集



遺跡略号 HKT-122
遺跡調査番号 9969

2002

福岡市教育委員会



1.A・B-1. II層下面



2.SK28 方形整穴

巻頭図版2



2.SF22 石積溝



1.SD20 石組溝

序

古くから大陸文化の門戸として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに130次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は共同住宅建設に伴って実施された第122次調査を報告するものです。

本調査地が位置する息浜は鎌倉時代からその名がみえ、対外交渉の拠点の一つとして、あるいはそれをめぐる戦乱の場として、歴史上非常に重要な地域です。

調査では往時の繁栄を偲ばせる輸入陶磁器や石積の建造物遺構が検出されるなど多くの成果を収めることができました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでの理解とご協力をいただいた施主の株式会社ミツヤマ電気、および施工の株式会社高松組の方々を始めとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例 言

- 1.本書は共同住宅建設に伴い福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成11(1999)年度から翌平成12(2000)年度にかけて発掘調査を実施した福岡市博多区古門戸町61所在の博多遺跡群第122次調査の報告である。
- 2.本書に掲載した遺構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課文化財主事佐藤一郎の他、土橋尚起、森本幹彦が行い、撮影は佐藤が行った。遺物の実測・撮影は佐藤が行った。
- 3.製図は遺構を埋蔵文化財課文化財主事上角智希、石水久美子、前野みさき、遺物は佐藤が行った。
- 4.本書の執筆・編集は佐藤が行った。
- 5.本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	9969	遺跡略号	HKT-122
調査地地籍	博多区古門戸町61	分布地図番号	千代博多48
開発面積	219.90m ²	調査面積	206m ²
調査期間	000221~000508		

本文目次

第122次調査

I.はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II.遺跡の位置と環境	3
III.発掘調査の概要	6
IV.遺構と遺物	8
1 検出遺構	8
2 出土遺物	12
V.小結	17

挿図目次

第1図 博多遺跡群発掘調査地域図(1/7,500)	2
第2図 博多遺跡群第122次調査周辺図(1/1,000)	3
第3図 博多遺跡群第122次調査II層上・下面遺構配置図(1/80)	4
第4図 遺構実測図(1)(1/40)	5
第5図 遺構実測図(2)(1/40)	6
第6図 遺構実測図(3)(1/40)	7
第7図 博多遺跡群第122次調査III層下面遺構配置図(1/80)	9
第8図 上層実測図(1/40)	10
第9図 出土遺物実測図(1)(1/3)	13
第10図 出土遺物実測図(2)(1/3)	15
第11図 出土遺物実測図(3)(1/4)	16
第1表 出出土器計測表	18

図版目次

図版1	(1) B-2 I層上面、A-2 II層下面(南東から) (2) B-1・2 II層下面(南東から)
図版2	(1) A・B-1 II層下面(南東から) (2) A・B-1 III層下面(南東から)
図版3	(1) S F02石積遺構(南から) (2) S F02石積遺構(東から) (3) S F12石積遺構(南から) (4) S F12石積遺構(東から)
図版4	(1) S F14石積遺構(南から) (2) S F14石積遺構(東から) (3) S F21石積遺構(東から) (4) S F21石積遺構(南から)
図版5	(1) S F31石積遺構(西から) (2) S F32石積遺構(西から)

- (3) S F22石積遺構（南から）
 - (4) S F22石積遺構（北から）
- 図版6 (1) S D20石組溝（西から）
(2) S D20石組溝（東から）
(3) S B24基壇状遺構（東から）
(4) S B24基壇状遺構（北から）
- 図版7 (1) S B24基壇状遺構土層（北から）
(2) S E01井戸（北東から）
(3) S K28方形堅穴（東から）
(4) A・B-2Ⅲ層下面（南東から）
- 図版8 (1) S E43井戸（北東から）
(2) S E43・44井戸（西から）
(3) S E44井戸（西から）
(4) S E44井戸（北西から）
(5) S E46井戸（南から）
(6) S E47井戸（北西から）
(7) S E49井戸（北西から）
(8) S K50土坑（南から）
- 図版9 出土遺物（1）
- 図版10 出土遺物（2）

I は じ め に

1 調査にいたる経過

1999年（平成11年）9月24日、有限会社光山ビルから本市に対して博多区古門戸町61における共同住宅建築に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群の北西部にあたり、^{篠原}息浜に位置する。申請地の北東120mでは共同住宅建築に伴う発掘調査が行われている。福岡市教育委員会埋蔵文化財課はこれを受けて1999年（平成11年）12月28日に試掘調査を実施した。現況は倉庫が解体されてさら地となっており、調査の結果、現地表面下50cmまでは混乱があり、同120cmまでの70cmは灰白色土と暗茶褐色上の細かい瓦層、その下層の焼土粒まじりの茶褐色上層（厚さ20cm）をはさんで、灰茶色の遺物包含層、同260cmで基盤の砂層を確認した。試掘担当者の所見によると、申請地は妙楽寺境内と考えられている場所であり、地表面下120～140cmの焼土粒まじりの層には明代の染付が混じり、その上面の細かい瓦層が妙楽寺関係の整地層と考えられる。基盤の砂層上面においても井戸、柱穴などの遺構が確認され、それ以前の集落も良好に遺存するものと考えられるとのことである。申請者と埋蔵文化財課は文化財保謹に関する協議をもったが、申請面積219.90m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

有限会社光山ビルと福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は翌2000年（平成12年）2月21日から5月8日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 有限会社光山ビル

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査統括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治

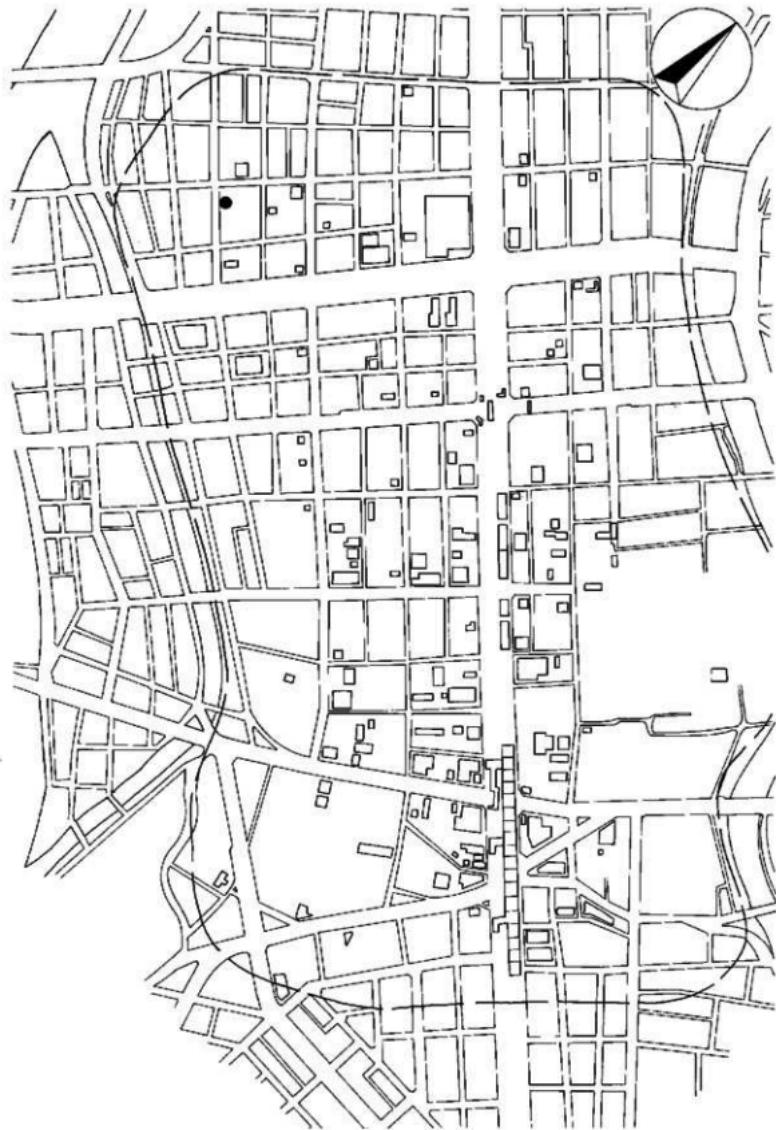
庶務担当 文化財整備課 谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）

調査担当 試掘調査 杉山富雄 加藤隆也

発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 尾花憲吾・大崎宏之・木山啓子・田原キヌエ・為房紋子・西尾タツヨ・播磨博子・山口慶子・萬スミヨ・土橋尚起・森本幹彦・三瀬大輔・古田容子・相川和子・石水久美子・前野みさき

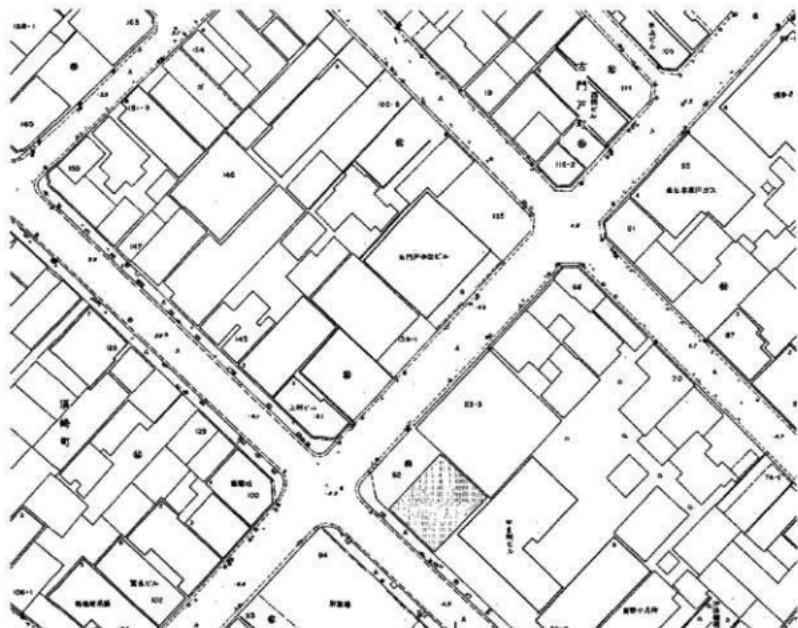
その他、発掘調査に至るまで諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の有限会社光山ビル、施工の株式会社高松組の方々をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

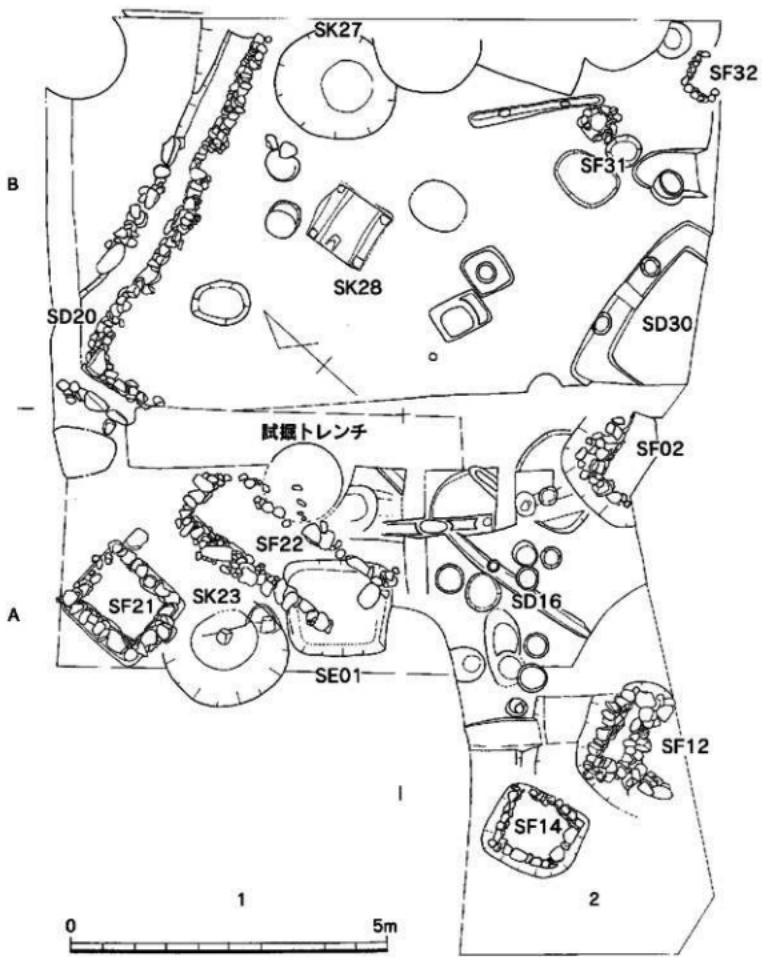


第1図 博多遺跡群発掘調査地域図（1/7,500）

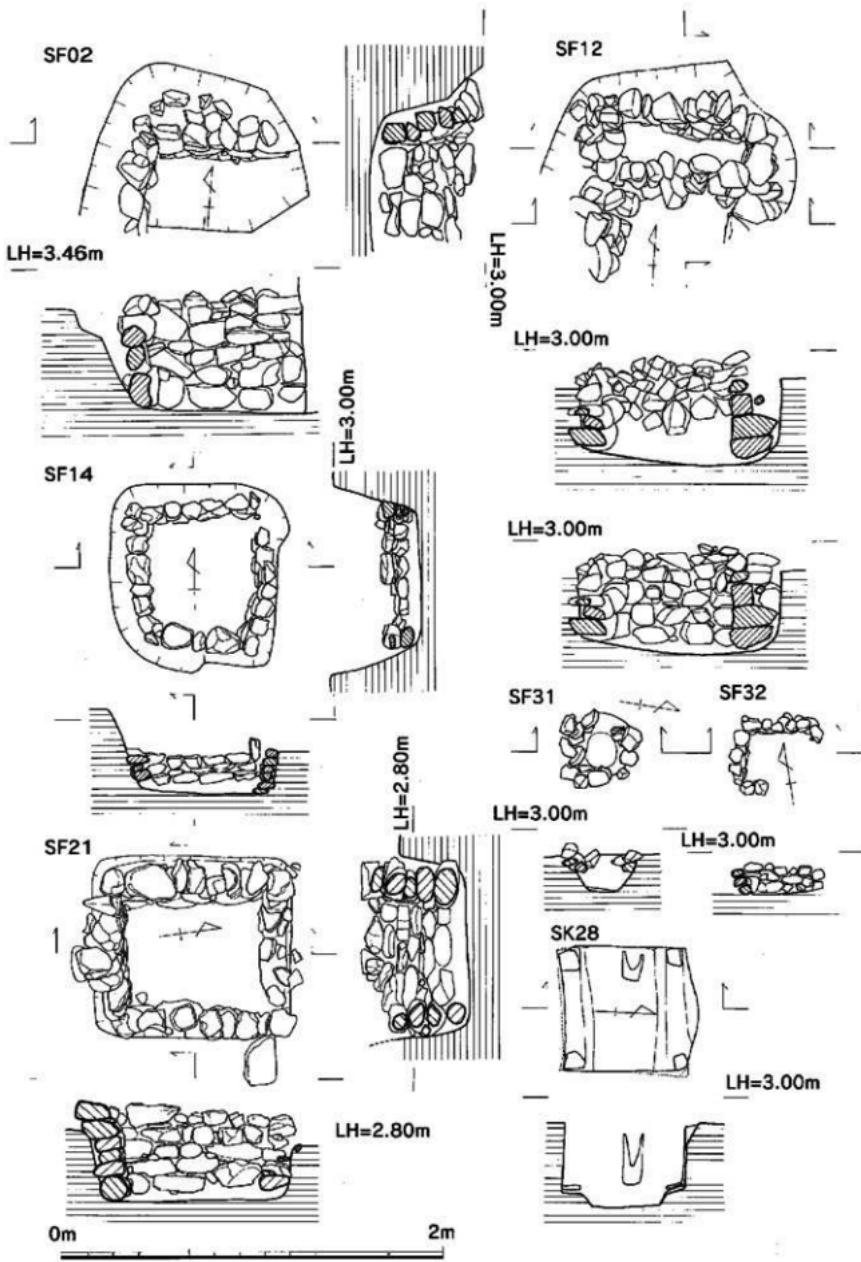
II 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は博多湾沿いに連なる古砂丘、那珂川右岸下流域に位置する弥生時代中期から近世にわたる複合遺跡である。その範囲は南北約1.5km、東西約0.8kmを測る。弥生時代中期から集落が営なまれ、中世前半からは対外交渉の拠点としてあまりにも有名な都市遺跡である。中世後半、蒙古襲来以降には鎮西探題が設置され、大宰府にかわる九州の中心となる。その度重なる戦乱、復興を経て、近世初めに長崎に国際貿易都市の座を明け渡すまで繁栄を誇っていた。調査地は那珂川下流右岸、博多遺跡群の北西部にあたり、息浜に位置する。試掘調査の所見で触れたように、申請地の周辺一帯は妙乗寺境内と考えられている場所である。妙乗寺は1361(正和5)年月堂宗規によって創建され、博多における対外交渉の拠点の一つとして、特に勘合貿易の時代には中心的な役割を果たした。天正年間(1573~92年)兵火にかかり焼失し、黒田長政の入城後、現在地の博多区御供所町に移転した。移転後も旧寺地・門前町に妙乗寺の名は町名として1966(昭和41)年の改変で古門戸町に編入されるまで残っていた。





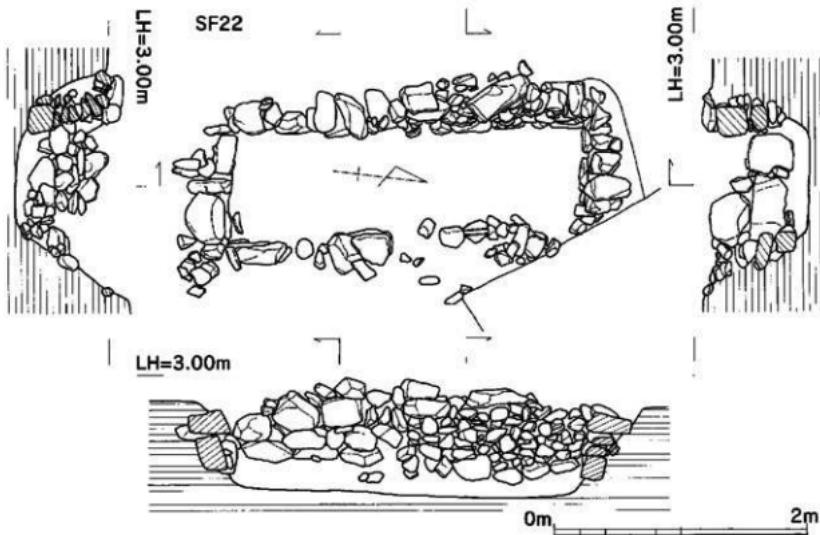
第3図 博多遺跡群第122次調査II層上・下面遺構配置図 (1/80)



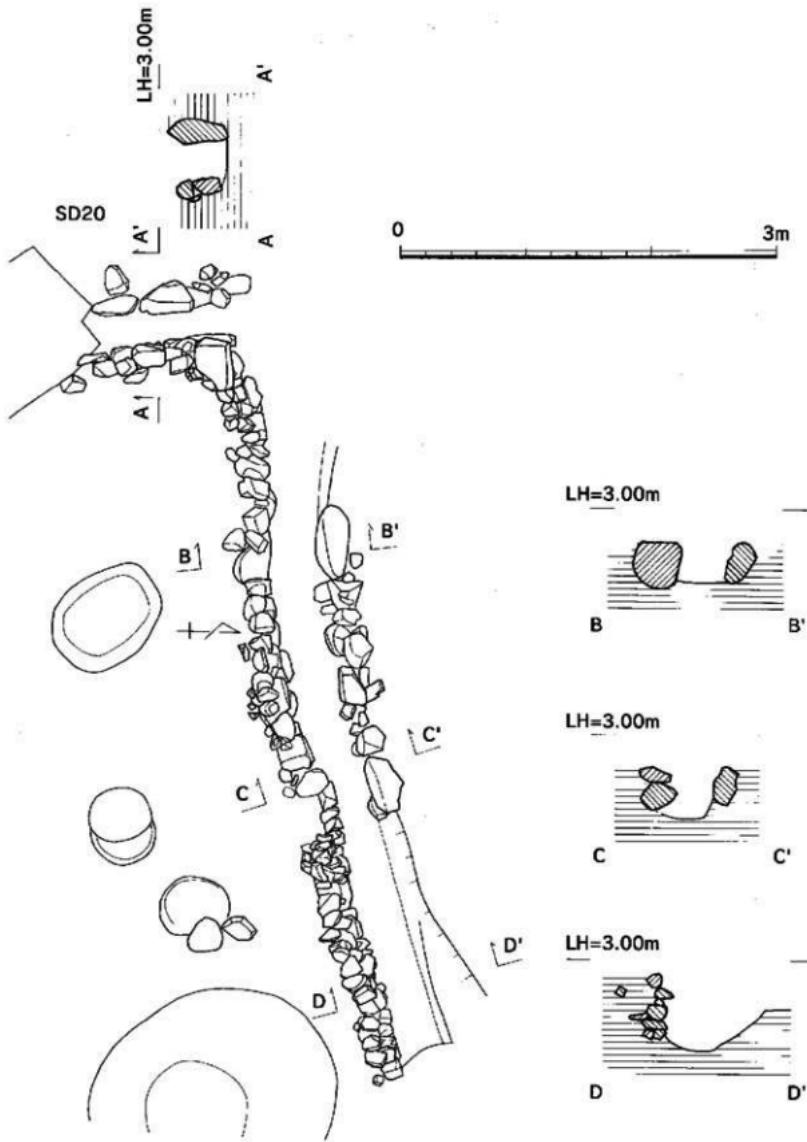
第4図 遺構実測図 (1)(1/40)

III 発掘調査の概要

試掘調査の所見に基づき、地表下50cmまでの表土を鋤取り、灰白色土と暗茶褐色土の細かい互層（I層）を最初の調査対象面とした。検出された遺構は近世から近代にかけての道路、それに平行する礎石建ての建物跡、溜柵状遺構、上管理設備である。細かい互層は妙乗寺関係の整地層ではなく、近代まで続いた道筋に伴うものであった。次に地表下1.2～1.3mで確認された焼土粒を多量に含む黒褐色土層（II層）上面まで重機で掘削し、II層は人力で掘り下げ、その下面の灰褐色土層上面（標高3.0m）でL字に屈折する石組溝1条、素掘りの溝2条、井戸1基、石積遺構7基、方形窓穴1基を検出した。遺構の時期は16世紀で、真北に近い主軸方位を取る。II層中や各遺構からは土師器や明代後半の青花や青磁等の陶磁器の他、瓦片、土單片が大量に出出土した。引き続いてIII層を掘削し、地表下3.2mの砂層（標高1.0m）上面で井戸8基（I基が16世紀で、他は12世紀後半）、石積基壇状遺構（基底部のみの残存で、13世紀後半には廃絶か）、柱穴・ピット状遺構40、土坑6基を検出した。



第5図 遺構実測図(2)(1/40)



第6図 遺構実測図 (3)(1/40)

IV 遺構と遺物

1 検出遺構

博多遺跡群一帯は都市化が進み、基幹道路を中心には基本的にはN-45°-Wの方位を取る街区から構成されている。本調査地も古戸門町の街区の一つに属し、N-45°-W方位の16m×13mの長方形を呈する。北西・南東の長辺に沿って西からA・B、北東・南西の短辺に沿って北から1・2と調査区を4つのグリットに分割し、包含層の土器の取り上げもそれに従っている。

SF02石積遺構（第4図 図版3）

II層下面、A-2で検出した石積遺構で、検出部分で長さ1.15m、幅0.55m、深さ1.0mを測る。腰石は25×15×20cmほどの石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。主軸の方位はほぼ真北に取る。遺構の南東部は調査区域外にかかる。

SF12石積遺構（第4図 図版3）

II層下面、A-2で検出した石積遺構で、検出部分で長さ1.25m、幅0.95m、深さ0.9mを測る。腰石は30×25×15cmほどのやや扁平な石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。主軸の方位はほぼ真北に取る。遺構の南側は調査区域外にかかる。

SF14石積遺構（第4図 図版4）

II層下面、A-2で検出した石積遺構で、長さ0.85m、幅0.8m、深さ0.45mを測る。10~30cmの礫を6段積み上げている。主軸の方位はほぼ真北に取る。

SF21石積遺構（第4図 図版4）

II層下面、A-1で検出した石積遺構で、長さ1.05m、幅0.8m、深さ0.85mを測る。腰石は30×20×10cmほどのやや扁平な石を用い、その上に次第に小さな礫を積み上げている。主軸の方位はほぼ真北に取る。

SF31石積遺構（第4図 図版5）

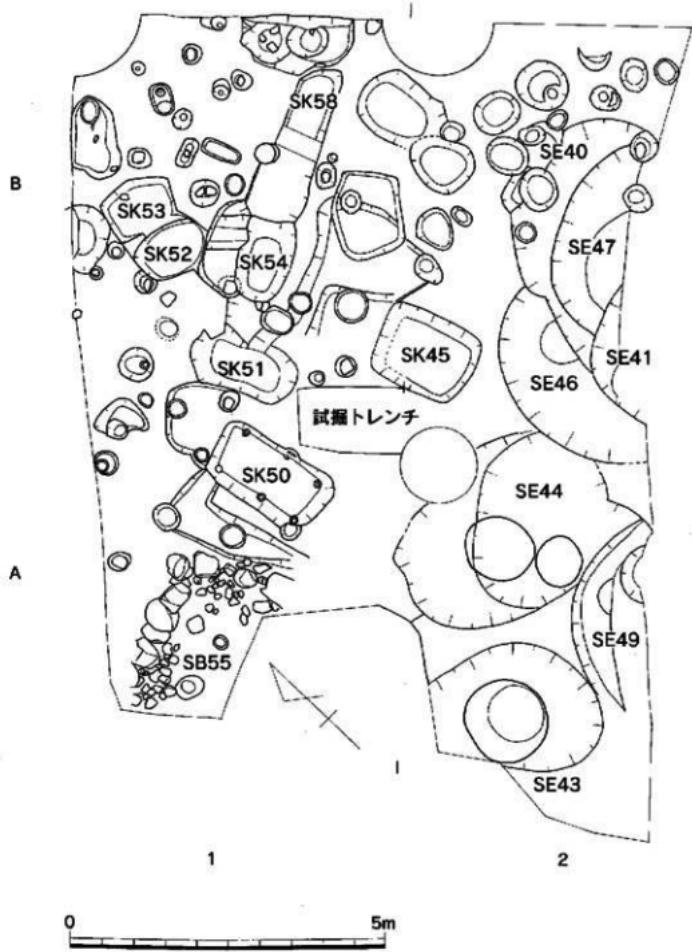
II層下面、B-2で検出したやや不整な石積遺構で、残存部で長さ0.3m、幅0.3m、深さ0.4mを測る。5~10cmの礫を3段積み上げている。主軸の方位はほぼ真北に取る。

SF32石積遺構（第4図 図版5）

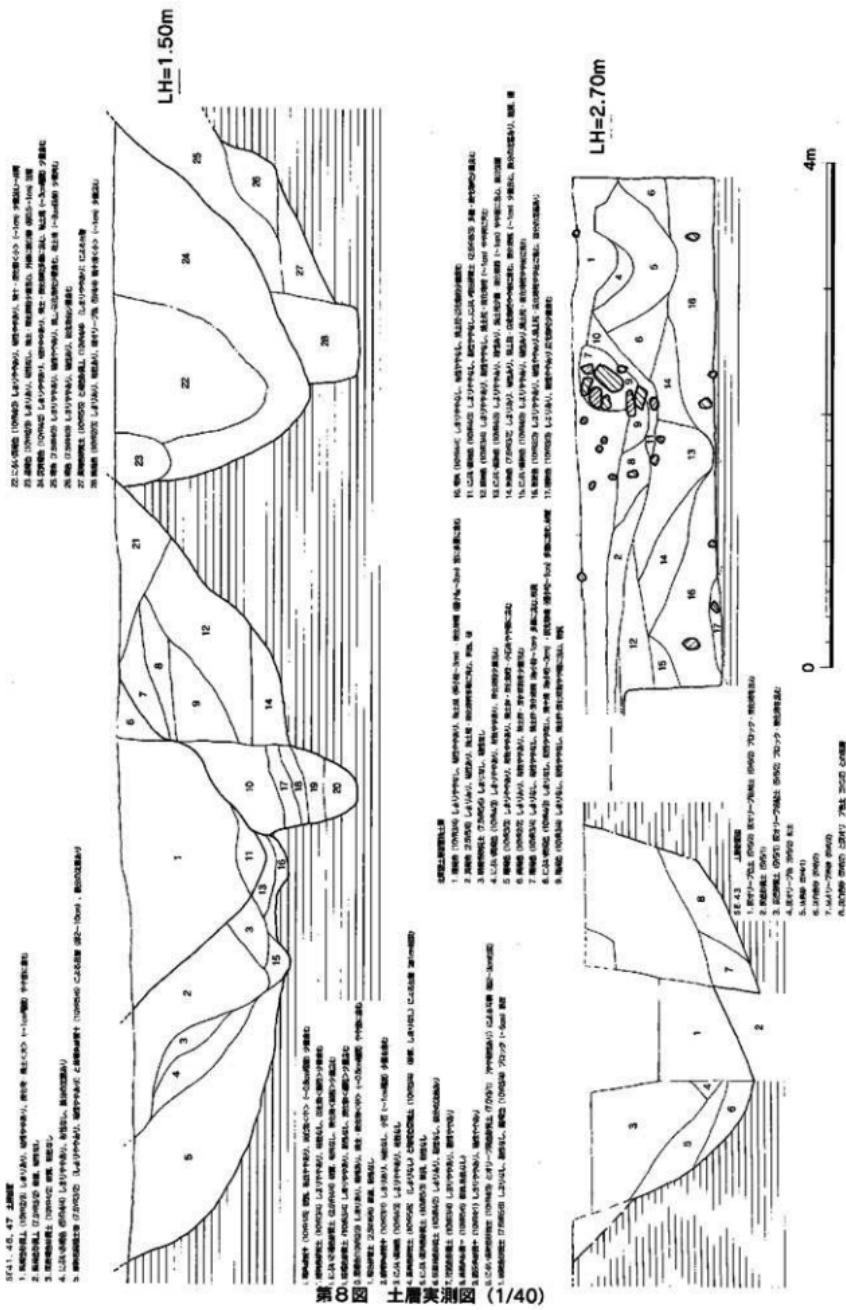
II層下面、B-2で検出した石積遺構で、残存部で長さ0.5m、幅0.35m、深さ0.25mを測る。5~20cmの礫を3段積み上げている。南東隅は工事のため先行して打たれた杭によって破壊を受けている。主軸の方位はほぼ真北に取る。

SF22石積遺構（第5図 図版5）

II層下面、A-1で検出した石積遺構で、検出部分で長さ2.7m、幅0.8m、深さ0.85mを測る。腰石は30×15×10cmほどのやや扁平な石を用い、その上に次第に小さな礫を6段積み上げている。主軸の方位はほぼ真北に取る。石組溝SD20に連結した遺構とみられるが、連結部位があつた遺構の北東隅は試掘トレンチによって破壊を受けている。



第7図 博多遺跡群第122次調査Ⅲ層下面造構配置図 (1/80)



SD20石組溝（第6図 図版6）

II層下面、B-1で検出した石組の溝で、砾を1段～5段積み上げている。検出した長辺の長さは6.4mを測り、両端は調査区外へ延びる。短辺の長さは1.5mを測り、北端は調査区外に延び南端は試掘トレーナによって破壊されているが、L字に折れた角から3.0mでSF22石積造構に連結するとみられ、瀬め樹と排水溝として機能していた可能性が考えられる。幅0.5m、深さ0.3～0.6mを測り、底面のレベルは東側、SF22から遠ざかるにつれて低くなっている。主軸方位はほぼ真北に取る。

SK28方形豊穴（第4図 図版7）

II層下面、B-1で検出した平面形が1m四方の正方形を呈する土坑で、壁は垂直に立ち上がり深さ70cmを測る。底面の南辺と北辺が20cm高くなり、四隅に扁平な砾や陶片を据え置く。東辺の底面から20cm浮いた状態で鉄製鋸先が出土した。主軸方位は真北である。

SB24石積基壇状遺構（第7図 図版7）

III層下面、A-1で検出した石積の基壇状遺構の基底部で、40～50cmほどの石が据え置かれ、その内側には裏込めとみられる拳大の砾が散在している。検出した長辺の長さは3.0m、短辺の長さは2.0mを測り、西側は調査区外に延び、南側は先行して打ち込まれたコンクリート杭によって破壊を受けており、全体の規模は不明である。主軸方位はほぼ真北に取る。

井戸

III層下面、A・B-2調査区壁面に沿うかたちで、井戸群が密集して検出された。遺構の時期は12世紀後半から13世紀前半にかけてのもので、造構埋上から出土する遺物は同じ時期の博多浜のように大きな破片が多量に出土するといったものではなく、破片が少量出土するといった具合である。III層中の遺物も同様に少ない。

SE43井戸（第7図 図版8）

III層下面、A-2で検出した。掘り方は上面径2.4mの略円形を呈し、深さは1.7mを測る。西側は調査区外に延びる。基底部中央に直径90cmの桶側の痕跡がみられた。

SE44井戸（第7図 図版8）

III層下面、A-2で検出した。掘り方は上面径3.0mの略円形を呈し、深さは1.4mを測る。基底部中央とそのやや南寄りに直径1.0mと80cmの桶側の痕跡がみられ、2基の井戸が切り合っていた可能性がある。

SE46井戸（第7図 図版8）

III層下面、A・B-2で検出した。掘り方は上面径3.0mの略円形を呈し、深さは1.7mを測る。東側はSE40・41に切られている。基底部中央に直径70cmの桶側の痕跡がみられた。

SE41・47・49井戸（第7図 図版8）

III層下面、調査区南東の壁面に沿って井戸の断片SE41・47はB-2、SE49はA-2で検出した。掘り方の切り合い関係からSE49→SE47→SE41の順に掘られている。SE41・47は直径70cmの桶側の痕跡を確認することができた。深さは1.9mを測る。SE49は調査区内では井戸枠は検出されなかつた。

SK50方形豊穴（第7図 図版8）

III層下面、A-1で検出した。平面形は長さ2.0m、幅1.1mの長方形を呈し、深さ0.4mを測る。底面の四隅と長辺の中央の6カ所に木杭の痕跡がみられた。壁面にあてがわされた横木を支えたものと推測される。

2 出土遺物

SE01出土遺物 (第9図 図版9)

土師器

小皿 (1) 底部は糸切り離しにより、体部外面から内底まで回転横ナデされる。口径7.1cm、器高1.4cm、底径5.4cmを測る。

杯 (2) 丸底の底部から口縁部まで内湾し、端部は鋭くおさめられる。底部の中心付近は未調整で、その周囲は回転ヘラ削り調整される。体部外面から内底まで回転横ナデされる。口径11.4cm、器高2.3cmを測る。

白磁 皿 (3) 口縁部がやや内湾しておさまる秆筒底の皿である。

青花 瓢 (4) 口縁部は内湾し、高台は断面方形を呈する。外面は口縁部に波涛文帯、体部に唐草文、内底見込には法螺貝を粗雑に描く。高台の外側まで施釉される。漳州窯系。

SF02出土土器 (第9図)

土師器 小皿 (5) 底部は糸切り離しにより、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径6.9cm、器高1.3cm、底径4.4cmを測る。

SK04出土土器 (第9図)

土師器 小皿 (6・7) 底部は糸切り離しにより、体部外面から内底まで回転横ナデされる。口径6.2・6.8cm、器高1.4・1.8cm、底径4.7・4.4cmを測る。

SK05出土土器 (第9図)

土師器 小皿 (8) 底部は糸切り離しにより、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径7.8cm、器高2.1cm、底径4.0cmを測る。

SB08出土土器 (第9図)

土師器 小皿 (9~15) 底部は糸切り離しにより、体部外面から内底まで回転横ナデされる。9~14は口径7.4~8.2cm、器高1.2~1.4cm、底径5.4~6.7cmを測り、11~13の口縁部外面は直立し、その下部の境は鋭く稜をなす。15は精良な生地を用い隔壁が薄く仕上げられている。口縁部はやや内湾気味に開く。口径7.9cm、器高2.0cm、底径3.0cmを測り、口径に比べ底径は小さい。隔壁に焼成され、橙色(5YR6/6)を呈する。陶器の可能性も考えられる。

SF12出土土器 (第9図)

土師器 小皿 (16・17) 底部は糸切り離しによる。16は体部外面から内底まで回転横ナデされ、口径6.2cm、器高1.5cm、底径3.2cmを測る。口径に比べ底径は小さく、外反気味の口縁部が大きく開く。口縁部に煤が付着している。17は内底をナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径6.8cm、器高1.6cm、底径4.5cmを測る。

SF14出土遺物 (第9図 図版9)

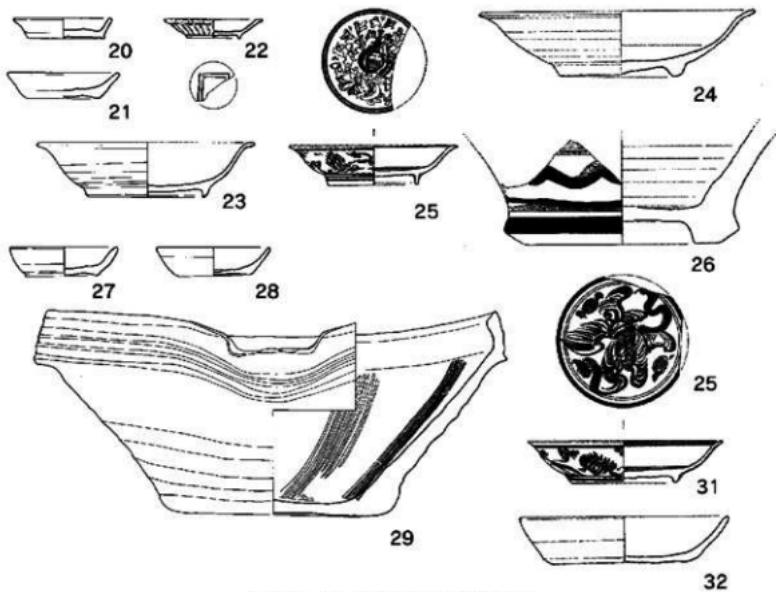
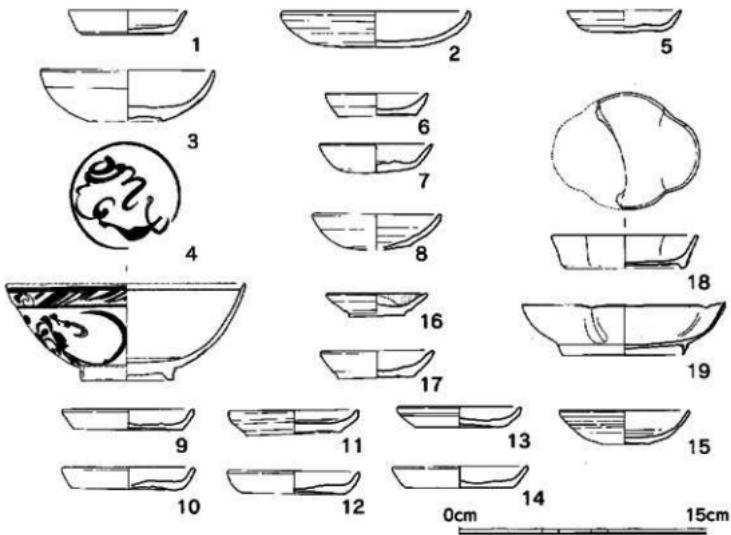
青磁 皿 (18・19) 景徳鎮窯系で、18は型打ち成形により4分割する。白色の胎土に灰白色(5Y8/1)の釉を高台内面まで施す。19は型打ち成形により分割し、口縁部を輪花に作る。高台はやや内傾する。白色の胎土に灰色(7.5Y6/1)の釉を全面に施した後、豊付の釉を搔き取り露胎としている。

SD20出土遺物 (第9図 図版9)

土師器 小皿 (20・21) 底部は糸切り離しにより、内底をナデ、外底には板状圧痕がみられる。20は外反する口縁部が短く立ち上がり、口径5.9cm、器高1.2cm、底径4.6cmを測る。21は口径に比べ底径は小さく、外反する口縁部が体部下位の屈曲部から大きく開く。口径6.7cm、器高1.6cm、底径4.2cmを測る。

陶器 皿 (22) 型作りで体部外面に蓮弁、高台内に二重の郭を表す。白色の胎土に翡翠釉を施す。

白磁 皿 (23・24) 端反りの高台付皿で、全面施釉後、豊付の釉を搔き取り露胎としているE-2-a類である。



第9図 出土遺物実測図 (1)(1/3)

青花 盆 (25) 端反りの高台付皿B1群で、外面と見込に牡丹唐草文を描く。全面施釉後、豊付の釉を搔き取り露胎としている。景德鎮窯系。

SF21出土遺物 (第9図 図版9)

陶器 壺 (26) 体部下半の破片で、にぶい褐色(7.5YR6/3)の胎上に、外面は白化粧土、鉄絵を施し、透明釉が掛けられている。内面にはオリーブ黒色(5Y2/2)の釉が掛けられている。磁州窯系。

SF22出土遺物 (第9・10図 図版9・10)

土師器 小皿 (27・28) 底部は糸切り離しにより。27は内底をナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径6.4cm、器高1.6cm、底径4.2cmを測る。28は体部外面から内底まで回転横ナデされ、やや薄手に作られる。口径6.9cm、器高1.7cm、底径4.3cmを測る。

備前焼 すり鉢 (29・30) 口縁端部の面取りはやや内傾し、29は窪んでいる。口縁部外面に円線を巡らせる。胎土は29かにぶい赤褐色(2.5YR6/3)、30が橙色(2.5YR6/8)を呈する。

SK27出土遺物 (第9図 図版9)

青花 盆 (31) 端反りの高台付皿B1群VII類で、外面に牡丹唐草文、見込には玉取獅子を描く。高台内は露胎となっている。景德鎮窯系。

SE41出土土器 (第9図)

土師器 杯 (32) 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。口径12.7cm、器高2.8cm、底径8.5cmを測る。

SE46出土土器 (第10図)

土師器 杯 (33) 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。口径8.7cm、器高1.3cm、底径5.9cmを測り、やや浅めで小型である。

SE47出土土器 (第10図)

土師器 杯 (34) 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。口縁部は外反し、端部下内面をややくぼませ、緩く稜をなす。口径11.1cm、器高2.2cm、底径6.9cmを測る。

SK50出土土器 (第10図)

土師器 小皿 (35) 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。口縁端部内面下を強くナデ、ややくぼませる。口径7.1cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測る。

SK51出土土器 (第10図)

土師器 小皿 (36・37) 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。36は外反する口縁部が短く立ち上がり、口径6.5cm、器高1.4cm、底径5.6cmを測る。37は体部下位の屈曲部から口縁部が直線的に開く。底部は厚く、口縁部は薄くおさめられる。口径7.6cm、器高1.8cm、底径4.6cmを測り、口径に比べ底径は小さい。

SK52出土土器 (第10図)

土師器 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。

小皿 (38) 口径7.9cm、器高1.5cm、底径5.7cmを測る。

杯 (39・40) 口径11.7・12.3cm、器高2.7・2.9cm、底径7.9・8.9cmを測る。

SK54出土土器 (第10図 図版9)

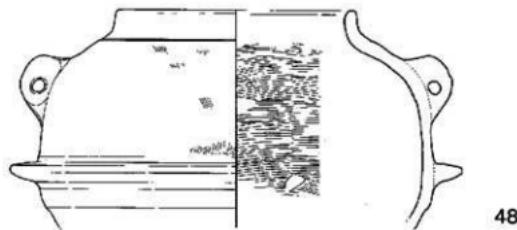
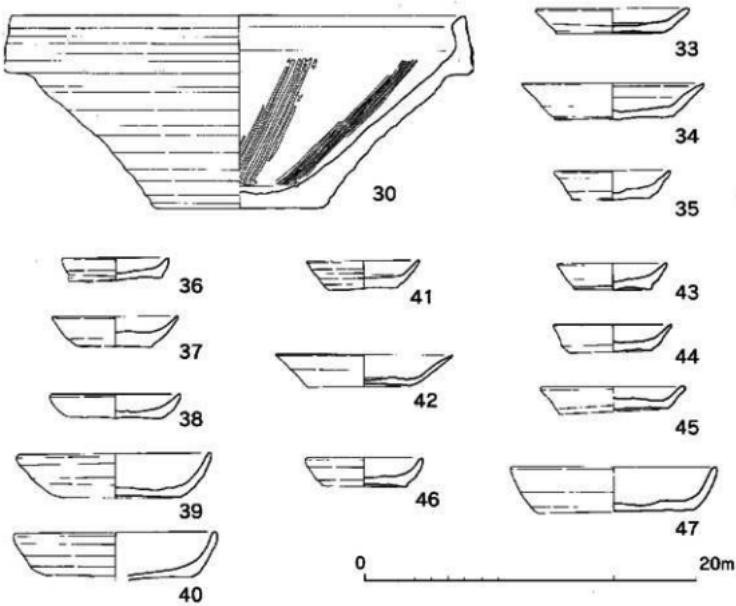
土師器 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。

小皿 (41) 口径6.8cm、器高1.7cm、底径4.0cmを測る。外底に墨書がみられる。

杯 (42) 口縁部は体部から直線的に開き、端部は鋭くおさめられている。口径10.7cm、器高2.0cm、底径6.1cmを測り、口径に比べ底径は小さい。砂粒を少量含む精良な生地を用い、良好に焼成されにぶい赤褐色(5Y5/4)を呈する。

SB55出土土器 (第10図)

土師器 小皿 (43・45) 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。体部下位で屈曲し口縁部は外反して開く。43・44は口径6.6・7.2cm、器高1.7cm、底径4.8・5.0cmを測り、45はやや大型で口径8.8cm、器高1.5cm、底径6.5cmを測る。



第10図 出土遺物実測図 (2)(1/3)

Pit13出土土器 (第10図)

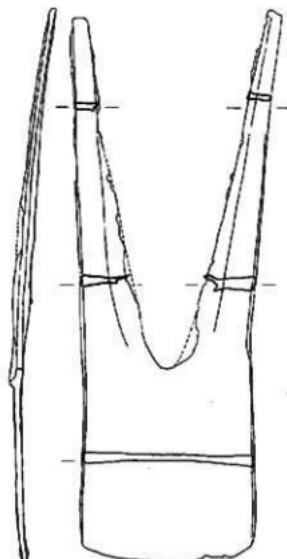
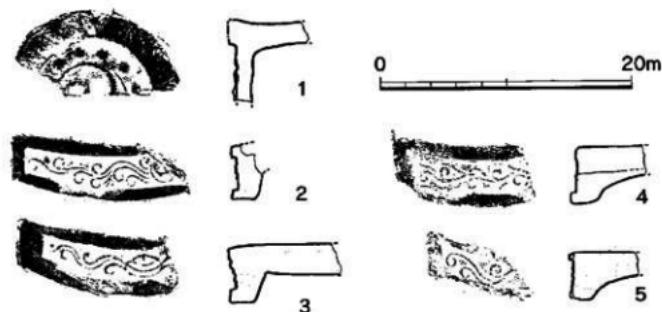
土師器 小皿 (46) 底部は糸切り離しにより、内底をナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径1.1cm、器高1.7cm、底径5.0cmを測る。

Pit98出土土器 (第10図)

土師器 杯 (47) 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。口径12.6cm、器高2.7cm、底径9.5cmを測る。

B-1, II層出土土器 (第10図 図版10)

瓦質土器 湯釜 (48) 口縁部は直立し、端部はわずかに平出をなすが丸くおさめられている。頸部には凹線を巡らせ、口縁部との境は緩やかである。肩部に耳を貼り付け、体部巾位には鈎を巡らせる。口縁部内面から体部外面にかけて横ナデ、体部外面にはナデ残された斜め方向の刷毛目が



第11図 出土遺物実測図 (3)(1/4)

残る。底部は欠失しているが、わずかな残存部位にはヘラ削りの痕跡がみられる。体部内面は横方向の刷毛目を施し、銅接合部の内面には指頭圧痕がみられる。胎土には砂粒を少量含み、オリーブ黒(7.5Y3/1)～灰色(N4/)を呈する。

瓦 (第11図 図版10)

軒丸瓦 (1) 下半部が欠失している。内区は右巻きの三つ巴文であるが、巴の頭部は失われその形状は不明である。外区の珠文は12個程度配されているとみられる。周縁の幅2.0 cmを測る。SF21裏込め出土。

軒丸瓦 (2～5) 2は宝珠の中心飾り、残存する左半部では8回反転する均整唐草文を配する。復元瓦当幅24.0 cm、瓦当厚4.0 cmを測る。A-1, II層出土。3は宝珠の中心飾り、残存する左半部では4回反転する均整唐草文を配する。復元瓦当幅20.0 cm、瓦当厚4.5 cmを測る。SF31出土。4の中心飾りは不明、残存する左半部では5回反転する均整唐草文を配する。瓦当厚4.0 cmを測る。SK24出土。5の中心飾りは不明、残存する左半部では3回反転する均整唐草文を配する。瓦当厚3.5 cmを測る。SK24出土。

鉄製鋤先 (第11図 図版10)

全長13.8 cm、上部幅18.5 cm、刃部は幅13.5 cm、厚さ0.7 cmを測る。押入部は長さ1.0 cm、幅1.5 cmのY字に開く。

V 小結

息浜の町割り方位 博多遺跡群の中でも新興の息浜は鎌倉時代の「蒙古襲来絵詞」にその名が初めて見え、1316年には妙楽寺が創建される。1333年に大友貞宗が建武政権から恩賞として与えられて以降大友氏は対外貿易港博多と深く関わるようになる。『海東諸国記』(中叔舟編、1471年成立)には「小二(少式)殿と大友殿分治、小二西南四千余戸、大友東北六千余戸」とみられる。

東北から西南方向へ長く延びる息浜の東北部での博多遺跡群第42・60・111次調査ではN-45°-Wに方位をとる溝や建物等の遺構が検出され、古い遺構で15世紀後半まで遡る。一方、それらの調査地より西南に位置する第46・55・78次調査、そして今回の122次調査では真北、もしもくは報れても10°未満に方位をとる遺構が検出され、古いもので12世紀後半まで遡り、16世紀後半までみられる。息浜東北部と西南部では異なる町割りを取っている。先の『海東諸国記』の少式氏が西南部、大友氏が東北部をそれぞれ分治していた記事について、少式氏が博多浜、大友氏が息浜を領有したと解されている。今までの発掘調査成果でみると限り息浜は室町時代には遺構・遺物とともに博多浜を凌駕する。また博多浜では聖福寺等の寺院に閑連する遺構も少なくなく、一概に町屋として捉えるには無理がある。博多浜と息浜の戸数の比率からみた場合、四千余戸と六千余戸では調査成果からみれば、もっと聞きがあつて然るべきだと考える。少式氏西南部、大友氏東北部となるのは息浜における領有を示し、15世紀後半に遡る町割りの二元化はその反映ではないだろうか。1587年、豊臣秀吉の命による博多の復興に際して、息浜東北部の町割りを踏襲して広範囲に及ぼせている。

参考文献

- | | | |
|-----------|---------------------------|------|
| 福岡市教育委員会 | 『博多26』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第281集 | 1992 |
| 福岡市教育委員会 | 『博多30』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集 | 1992 |
| 福岡市教育委員会 | 『博多35』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第327集 | 1993 |
| 福岡市教育委員会 | 『博多44』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第393集 | 1995 |
| 福岡県史編纂委員会 | 『福岡県史－通史編 福岡藩(I)－』 | 1998 |
| 福岡市教育委員会 | 『博多85』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集 | 2002 |

鉢団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底高 (cm)	鉢団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底高 (cm)	鉢団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底高 (cm)
SE01				SD20				SK52			
土師器小皿				土師器小皿				土師器小皿			
1.	7.1	1.4	5.4	20.	5.9	1.2	4.6	38.	7.9	1.5	5.7
上師器杯				21.	6.7	1.6	4.2	土師器杯			
2.	11.4	2.3	5.0	SF22				39.	11.7	2.7	7.9
SF02				土師器小皿				40.	12.3	2.9	8.9
土師器小皿				27.	6.4	1.6	4.2	SK54			
5.	6.9	1.3	4.4	28.	6.9	1.7	4.3	土師器小皿			
SK04				SE41				41.	6.8	1.7	4.0
土師器小皿				土師器杯				土師器杯			
6.	6.2	1.4	4.7	32.	12.7	2.8	8.5	42.	10.7	2.0	6.1
7.	6.8	1.8	4.4	SE46				S855			
SK05				土師器小皿				土師器小皿			
土師器小皿				33.	8.7	1.3	5.9	43.	6.6	1.7	4.8
8.	7.8	2.1	4.0	SE47				44.	7.2	1.7	5.0
SBO8				土師器杯				45.	8.8	1.5	6.5
上師器小皿				34.	11.1	2.2	6.9	Pt13			
9.	8.0	1.2	6.5	SK50				土師器小皿			
10.	8.0	1.3	6.6	土師器小皿				46.	7.1	1.7	5.0
11.	8.3	1.3	6.7	35.	7.1	1.8	4.8	Pt98			
12.	8.0	1.4	5.9	SK51				土師器杯			
13.	7.4	1.4	5.4	上師器小皿				47.	12.6	2.7	9.5
14.	8.2	1.3	6.5	36.	6.5	1.4	5.6				
15.	7.9	2.0	3.0	37.	7.6	1.8	4.6				

第1表 出土土器計測表

図版



(1) B-2 I層上面, A-2 II層下面 (南東から)



(2) B-1・2 II層下面 (南東から)

図版2



(1) A・B-1 II層下面(南東から)



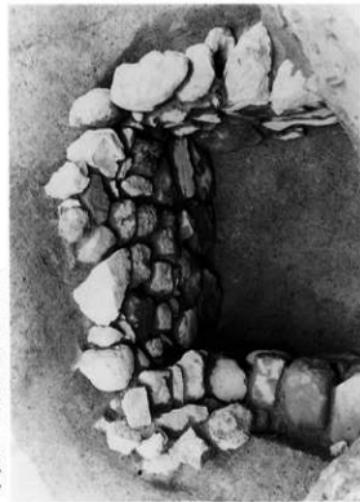
(2) A・B-1 III層下面(南東から)



図版4



(2)SF14 石積遺構 (東から)



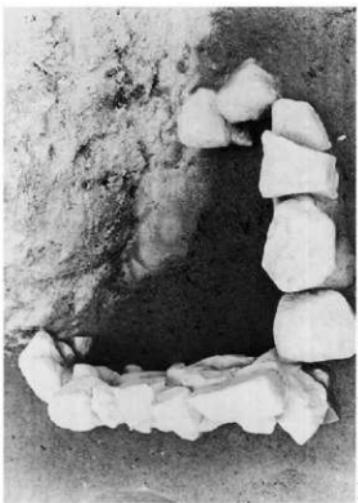
(4)SF21 石積遺構 (南から)



(1)SF14 石積遺構 (南から)



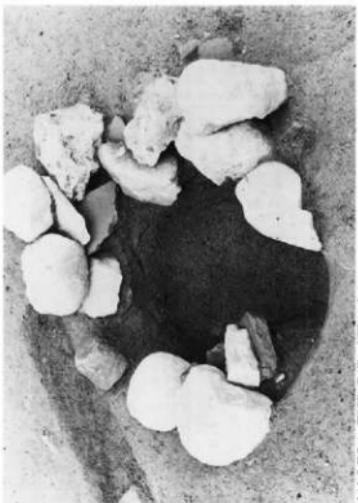
(3)SF21 石積遺構 (東から)



(2)SF32 石積遺構（西から）



(3)SF22 石積遺構（南から）



(1)SF31 石積遺構（西から）



(4)SF22 石積遺構（北から）

図版6



(1)SD20 石組溝（西から）



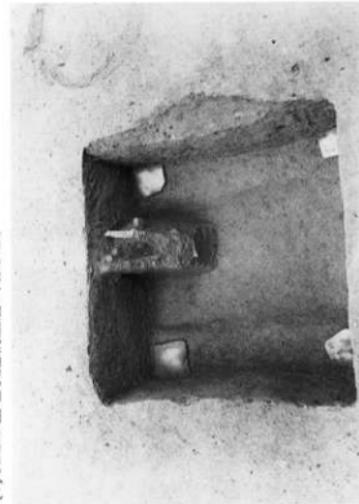
(4)SB24 基壇状遺構（北から）



(2)SD20 石組溝（東から）



(3)SB24 基壇状遺構（東から）



図版8



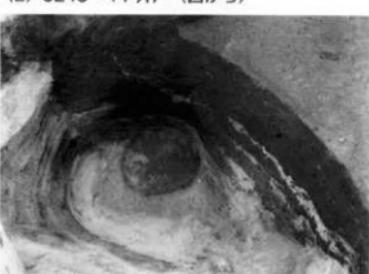
(1) SE43 井戸（北東から）



(2) SE43・44 井戸（西から）



(3) SE44 井戸（西から）



(4) SE44 井戸（北西から）



(5) SE46 井戸（南から）



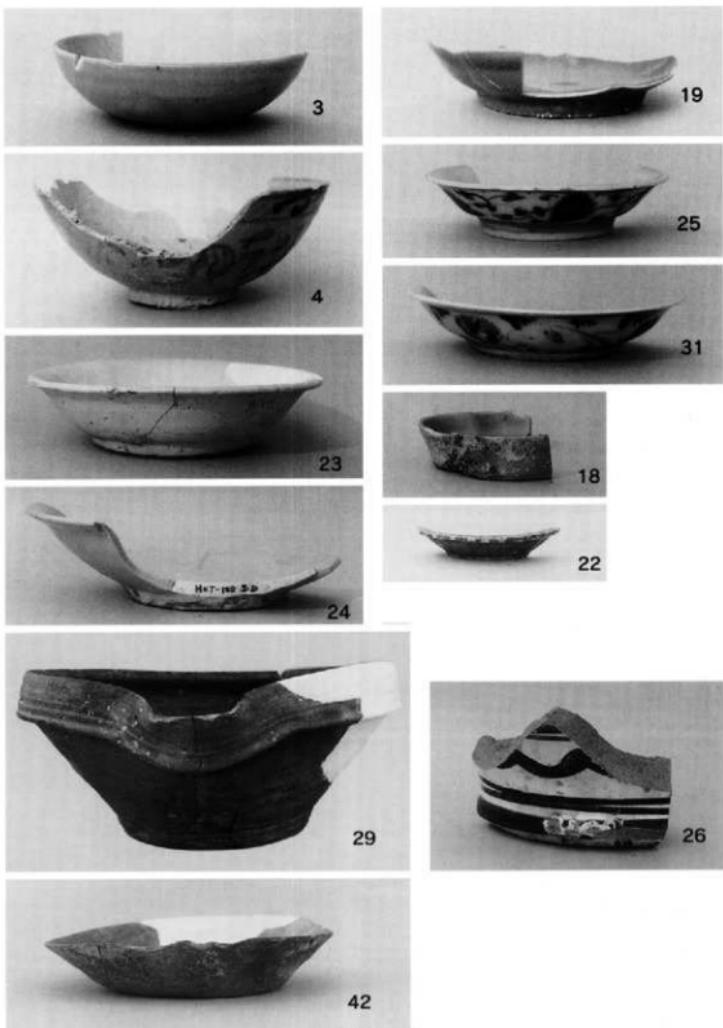
(6) SE47 井戸（北西から）



(7) SE49 井戸（北西から）

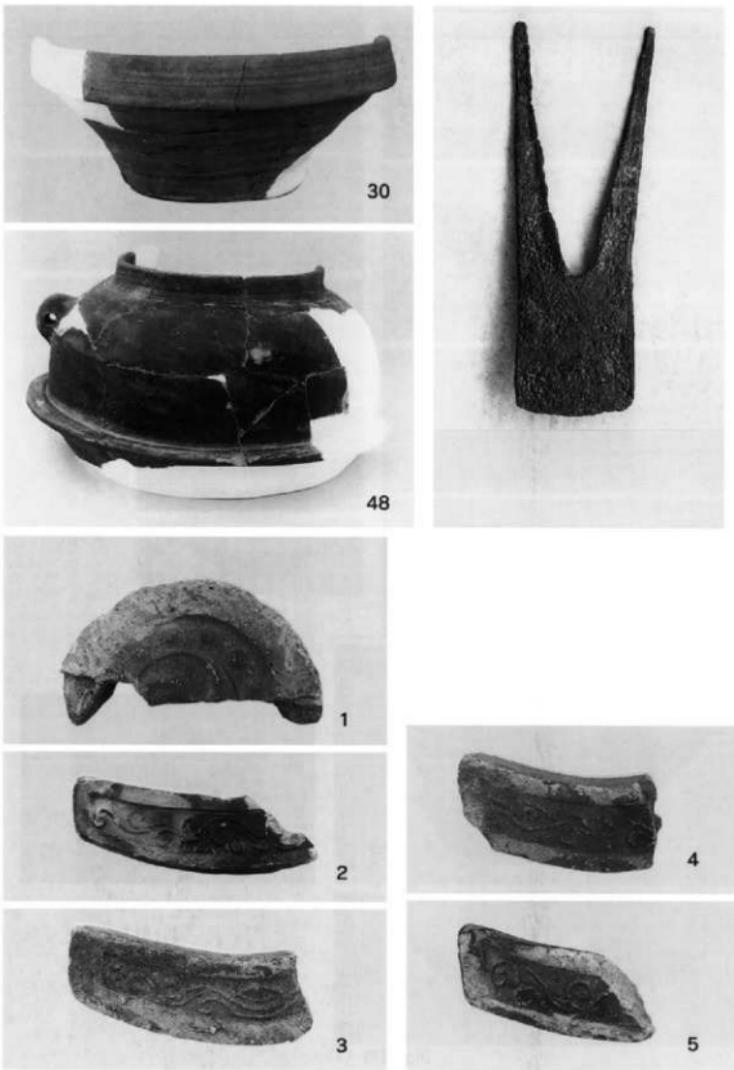


(8) SK50 土坑（南から）



出土遺物（1）

図版10



出土遺物 (2)

博 多 84

－博多遭難群第122次発掘調査報告書－

2002年（平成14年）3月29日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番11号

印 刷 今井印刷株式会社

福岡市中央区赤坂1丁目2番18号
